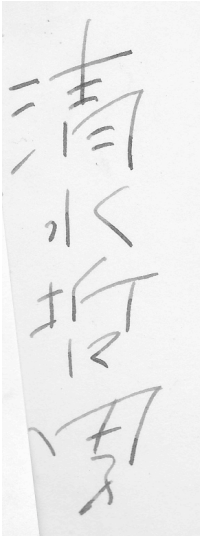
『喝采』『水の上衣』から



清水哲男氏（1938 年～　）

目次

唄・一九六一　2
喝采　4
RIVER BLUE　6
食卓　8
待たれている朝　10
少年　13
恋唄　14
美しい五月　15
展覧会・展覧会・詩集・詩集・あっ！　16
書きたくなかった61行　19
付記
著者略歴

唄・一九六一

見つめていると
ぼくの胸に
昏い空がひろがっていく
裂目からたれさがるぬれているもの
たとえば
花　唾液のような
指　魚のような

パンを噛る
太陽の無い日曜日
眼のなかを
はしる
いちまいの魚
嘘でもよいから
食べてみてくれ
かつての礫のなかで飲みわけた
記憶のなかの涙という涙を
その透明な頭蓋を
溢れてくる
少女のあしうらの夢で
ぼくは一罐の水を沸きたたせ
ひときれのレモンをうかべてみたい

だが
美しい夜明けは

遠ざかるばかり
セロリのような神経の束を
ふくらませ
咽喉でせめぎあう
魚のひとむれ
黒い葡萄を押しつぶして
だあれも棲めない
季節が近づく

ある日
ぼくの胸には
魚がながれ

昏い水族館は
しめやかに開館するのだろうか
海を想わせる花を散るのか
唄うたって
みんなが哀しむ
季節の葉脈に
やわらかく太陽が育つのだろうか

魚はしる
魚ながれる
火刑地へ急ぐように
昏い空目指して
ぬれているものを
指でひっかきまわしたように

血を頒けた記憶は
絶望に身をこする
知っているのだ
美しい夜明けは
遠ざかるばかり

カレンダアをめくる手つきで
暗い日曜日を唄うひとたちよ
涙なんかあるものか
ぼくは知らない
花のように舞いおりる
魚のひとむれ
あるいは
殺しても
待たねばならない
眠ること
ひといきに眠ること
夢みはしない
夢みはしない

喝采

だが
あなたの思い出はない
私のなかには

花もない
学校もない
あなたの網膜のあわいには
吐息につつまれた町と
敵の後姿が
やさしく光っている
未来に関する
希望に関する
残酷な哲学のなかで
あなたは眠ることさえできるのだ
けだものの目蓋を透かして
私が所有する
あなた
その肺胞
その涙
空の思想
はりつめているだけの痛み
むしろ私は
しんみりと眠ってみたい
あなたの髪につつまれた
暗闇の片隅に
皿のように光る鏡をおいて

そんなことができるもんか
あなたは
コオヒイの湯気のむこうがわにいて
胸のかたちを整え

少し血のにじんだ頬を
朝の光にたたかせて
ああ
じっと喝采に聞きいっている

RIVER BLUE

河
激しいあなたの舌打ちを浮べ

街中の鏡を泡だらけにする
かつて
パリでペトログラアドで
妄想はそのようにふるえていた
ラ・ラ・ラ
氾濫におびえたラグタイム
私たちは頭をたれて歩き
屈葬のかたちで
対話にしがみつく
朝は
敷石の下の声に誘われ
水しぶきをあげて
白日のはじまりである
あかるすぎるはね橋
そのむこうの墓のある町へ
水脈は荒廃しながら

口笛のように続いていく
そこでは
生臭い苔が生活し
ちりめんじゃこは食べられて
笑っているだろう
恐ろしいことだ
未来がそのようにあるということは
何時か
何処かで
私たちは広場を這いまわる
その日溜りで
あなたの汚れた胸を飾るために
ふりむいて取り出す
日除眼鏡
その時あなたは
ボクシングに耽る普通の娘になり
例えば単純に
まぶしい水面から
バルドオのように顔をあげる
あなたまでの距離に
かかってはゆがむ虹の埃
乱撃される私の涙腺
ひとしきり
錯乱を装ってから
私は
自覚した安易さで
柵を越え

偽善の首を洗いに出かけよう
噴水は無い
この町のどこにも

食卓

さあ音楽だ
飛上ったら一息に
真中の巨きなダリアの花瓶に
抱きついてひっくり返れ
果物という果物に
腰の手斧を撃ちこんで
騒ぎまわる蜂どもは
手近な茶碗で監禁せよ
笑う声　威嚇する声
大人の声は大嫌いだ
フォークを蹴散らし
ナイフを片手に俺たちは
ナプキンをかざした
陰気な革命家だ
皿の上で唸っている
輪切りにされた焼豚に
顔と両手を突っ込んで
しばし絶命するのが
俺たちの儀式である
活火山の噴煙をあげる

スープの隣で生れてはじめて
眼を閉じた名も無い魚が
嬉しそうにレモンを咥えて
西洋流に果てている
バルドオの唄でもしんみりと
囁いてやればよいのだが
未だ占拠したわけではないのだから
傷ついた奴には繃帯を
死にかけている奴には気休めを
無思想な奴には涙腺を
せいいっぱい与えて走ろう
無論背後から撃つのは良い
だが撃たれたら
決して背中を向けずに大声で死ね
女は葱だ　男は敵だ
味方は断じて子供たちである
だが多分彼等には出会わない
大人よりも長い過去を
クッキングブックの中から
護送して帰る途中でいつも彼等は
疲れて眠りこんでしまうからだ
子供たちと平和を自由を
南京豆のように頒ちあえる日は
いつだろう　進撃だ！
ありもしない星をみつめて
首都なんかフライパンに叩きこむつもりで

待たれている朝

犇めく理由のなかで全ての朝が待たれている

朝

どんな朝

醒めかけた夢のせとぎわを

灰色の貨車が暴走する朝

地球の天蓋を踏みぬいて

新しい声が垂れ下り増殖する朝

恐怖が人のまぶたに

奇妙なカレンダアを吊るす朝

人はいきあたりばったり

生活のために子供を殴ったり

展覧会を見たり手拭いを頭に歌ったり

赤い手をかり集めて

死んだ人を焼きはらったり

借金をはらわなかったり

押しこんだりすましたり

絶望と希望の中間にともかく

朝をかたづけては次を待つ

次

次の朝

向日葵の高さに滅びた朝

もしよかったら君も来るのだ

映画館よりも暗い所
映画を見ているぼくの眼の裏側
清純スタアがつま先でまさぐる貴族の巣
君は見るだろう
焦点の支えが折れた幼い朝の残像を
つつましい家庭で打たれる柩と
水時計の水を飲んでいるぼくの後頭部の嗤い

黒人のようにひざをかかえたぼく
土管のなかを手さぐりで
腸をむすび卵をつなげた朝
地下室の藁や煙草の匂い
ひとりで立っていた孤独な蛇口の唾
自分自身を塗りこんでしまった
死に関するデッサン
その骨組みのやわらかい魚は
昏いレモンを噛まされて
なかなか朝がとどきそうもない
ぼくの胸骨にひっかかっている

再び
再び現実的な朝
可能なかぎりの不安定な属性を従えて
登場してくる朝
肛門を吸盤のように開いて
みそ汁をすする娘たちの朝
コップに落ちる教授のひげの朝

社会部トップの死刑囚の朝
或る種の実験の朝
さかさまの椅子の朝
生まない蛾の朝

ぼくは二十三歳
笑うということは
もうたいして面白いことではない
無名氏の肖像を撫でたりさわったり
レモンの車輪を小さな日溜りに積みあげて
もしも君ならば
なめほうだいの涙をながす
この貧しい朝の習癖はなんだろう
返してくれ
倒されて切り裂いたあの朝の空を
それが単純だと言うのなら
花で飾られなかった兵士の空を
最も孤独がたかまる朝かれらは
思いきり音の出る玩具を両の耳につめこんで
誰かの名前を叫んだはずだから
この愚鈍
この愚かな純粋性をぼくは問いたい

純粋
純粋な朝
新しいこと移動すること
単純な決意で偽装する朝

後悔の汗に顔を埋める若い母親の朝
他人とそっくりの火を焚く朝
他人のように朝を育てて
再び眠りにおちる君だけの朝

ぼくは二十三歳
軒づたいに朝が配る風はいらない
麦藁帽子と海をつなぐ一直線の朝もいらない
いらない　いらない
はじめて君が血を見た日の朝よりも
ぼくが待っているのは平凡な朝だ
なんでもない朝
目覚めたら見知らぬ部屋に転っていて
滝のような激しい落差でどんどん年がとれる
朝よ　来い！

少年

火に向わせるもの。私を酒に連れていくもの。そして花に、永遠の若い時間の前に、私をひきすえるもの。

私は十二歳。赤い眼鏡をかけている。もう会うこともない若い両親は、小皿をしきつめた部屋で眠っている。どんな希望のために私は働くのだろうか。陰湿な流れ星。人間は十二

を越したらもう駄目さ。

歯の間の嵐。水の外套。私は涙のように時間を区切る。歩いている姿がいちばん醜いと信じている精神よ。ざあっと外套をぬぎすてて、私は流れるにまかせた影の退路を拓く。

鏡よりも少し小さな私の頭。のぞきこむと、光には深さもないし、壁もないことが判る。肖像の背後で鳴っている音。いったい私には何が美しいのだろう。放っておいてくれ。世界中の水溜りにうつっている花々が、すでに汚れて私の中にあることがどんなことであるのか。私は説明するために考えてみたい。

恋唄

日が沈む
れんこん、ごぼう、にんじん、かぶら
それらの色の散らばった深さに
そして、一撃の下に闇！
ぼくが見るのは
鳥を放つように火を放つ
あなたの水の手袋
燃える酒はほとんど涙だ
花束のようにピッケルを振った頃の

嗚咽も静かに戻ってくる
空の灰、年老いたぼくたち
炎の樽をひきよせて
藁を打つ木槌の高さで
接吻する

美しい五月

唄が火に包まれる
楽器の浅い水が揺れる
頬と帽子をかすめて飛ぶ
ナイフのような希望を捨てて
私は何処へ歩こうか
記憶の石英を剥すために
握った果実は投げなければ
たった一人を呼び返すために
声の刺青は消さなければ
私はあきらめる
光の中の出合いを
私はあきらめる
かがみこむほどの愛を
私はあきらめる
そして五月を。

展覧会・展覧会・詩集・詩集・あっ！

この男を形容しよう
この男から先ず奪うもの　それは帽子
それから靴　次に眼鏡
それから髭で　それから尻尾
四十腰に五十肩
そして心臓　それからあそこ
かん高いブルースに消えかけた煙草
これだけ奪えばあなたに似た人

この男を登場させよう
この男から先ず奪うもの　それは算術
それから行列　次に吊り皮
それからくしゃみで　それからお皿
二枚の舌に選挙権
そして挨拶　それからあそこ
握りしめた小銭に坐りかけた椅子
奪わなくてもあなたに似た人

季は秋　展覧会　展覧会
芸術の秋　詩集　詩集
見まくる　見まくる　男と女のなかの男
読む　読む　読む　読む　ふむ　ふむ　ふむ
迫力ある喫茶店に迫力無い男

双生児　ソーセージ　噛めない日暮

右手に詩集　左手に目録
水呑む　呑む水　水呑む　水無い
眼鏡についたごちゃごちゃの色
汚れてしまったレンズの焦点

この男を退場させよう
この男に先ず返すもの　それは鉢巻
それから褌　次に精神
それから小鳥で　それから初恋
海老原の左に戦後派右翼
そして握手　それからあそこ
不景気な職場に来年の暦
返したところであなたに似た人

季は秋　秋は芸術
展覧会　展覧会　詩集　詩集　あっ！
男が消された　涙なしの暗殺
汚れに汚れた焦点一発
絵の廊下や彫刻の壁　詩の窓や本の扉
常に飛行する悲しき鉛
それは夢見るあなたの眼球
男が消えた　あなたに似た人

書きたくなかった61行

いねましものをいねましものを

いねましものを旅に出て
小さな影人間の楕円
相異なる二つの
現実を軽んずる偉大な魂に
不離不即踏みまよい
はじめて母に絶望したときの
驚愕に価する麦飯の臭気を
考えてもみてください
混ぜこぜの食器なり
妹の脚を流れる油なり
何もかもが私にとっては
ほとんど嗚咽だ
小さい港があったんだって
大きい空があったんだって
百姓たちは
はじめて海を見たんだって
みんなみんな叫んだんだって
黙っていられるかこれが
黙っていられるか
ああ竹の床を鳴らして
父よそんなことを言うのはやめて下さい
白い頬を（なぜだ百姓！）
親類縁者の肩ごしにぽかんと
のぞかせるのはやめてくれ
私は私の足音が
闇のなかでほら私自身の血のように
かたまっていくのを知っている

鳥がきて羽毛の虹
私の頭蓋を喰い破り七色の七色の……
だがそんなことは夢なのさ
画用紙の豊饒　小学生の帽章
革命とロバのパン
摩損した金片の継続的流通みんな
私の軌道に仕掛けられた夢なのさ
だからといって私には
父の眼球母の毛髪
妹はそっくり舌まで母だ
楽器の弦を純粋に共鳴させると
なんて馬鹿馬鹿しい
父が踊る母が踊る私が踊り
妹が踊る
踊ら踊り踊る踊る
未然連用終止連体
つまらない噂がたつんだ命令だ
踊れ踊れ許し難き独楽の逆立
あわれなるかなハンス・ハンセン
だから私は旅に出た
だからといって旅には死ねない
影が見える狂える一族
悪党ぶった肩そびやかし
ケチャップの夕陽を逆光に
火星の時まで跳躍しようと
身構える私の晩年に
再び赤い楕円を蹴込んで出て行く

私の娘私の息子私にはわかる
今は未だほんのあぶくにすぎないものが
もう踊らもう踊りもう踊る
影はまざり私に告げる
いねましものをいねましものを
かくも笑いさざめき踊るとは。

〈付記　収録詩篇について〉

『喝采』（一九六三年・文童社）から――
「唄・一九六一」「喝采」「RIVER BLUE」「食卓」「待たれている朝」
『水の上衣』（一九七〇年・赤ポスト）から――
「少年」「恋唄」「美しい五月」「展覧会・展覧会・詩集・詩集・あっ！」「書きたくなかった61行」

清水哲男（しみず　てつお）

一九三八年、東京に生まれる。主な詩集に、『喝采』（一九六三年）、『水の上衣』（一九七〇年）、『水甕座の水』（一九七四年）、『スピーチ・バルーン』（一九七五年）、『東京』（一九八五年）、『夕陽に赤い帆』（一九九四年）、『黄燐と投げ縄』（二〇〇五年）などがある。